

『旅の重さ（南部アフリカ紀行）』

“ビクトリア大瀑布とチョベ国立公園・喜望峰・南部アフリカ漫遊 8日間”

[JTB 旅物語]

出発 平成 13 年 8 月 11 日（土）

帰国 平成 13 年 8 月 18 日（土）

添乗員：小堀由美子さん

8 月 11 日（土） 曇り一時雨

午後 4 時半過ぎに成田空港第 2 ターミナル駅に到着し、いつものように QL ライナーでスーツケースを受け取った後、I 団体の集合場所に向かった。添乗員さんの説明の後、出国手続きに並んだが、夏休みのピークということで、たいそう混雑していた。今回は 1 人参加が僕を含めて 4 名で、計 17 名のパーティーであった。さくらラウンジで生ビールを飲んで出発を待ち、免税店ではうちのスタッフへのおみやげとして口紅等を購入した。

JL739 便香港行きは、定刻の 18 時 55 分に離陸した。機内ビデオで三谷幸喜監督の「みんなのいえ」を見て過ごした。今回は長時間のフライトということで、初めてビジネスに搭乗してみた訳だが、機内食(夕食)は豪華でたいへん満足した。特に『さざえの酢味噌和え』が美味しかった。おかげでアルコールも進み、ブルゴーニュ・ワインが旨かったせいもあって、少々飲み過ぎてしまった。

日本時間の 22 時 55 分頃から香港上空に差しかかったが、夜景がとても美しかった。着陸は 23 時 08 分(現地時間で 22 時 08 分)で、予定よりも少し早かった。

乗り換えの手続きには結構手間取り、SA287 便への搭乗が始まったのは、香港時間の 24 時 15 分過ぎからであり、定刻より少々遅れた出発となった。搭乗後 1 時間ちょっとで夕食が出てきたが、さして空腹でもなくてあまり食べられなかった。

いつもなら、行きの機内では 2 時間くらいしか眠れず、旅の初めは少し辛いのだが、ゆったりとして座り心地がいい所為か、たつぷりと眠れたことが嬉しかった。6～7 時間眠った後、空港で購入した吉村昭の本（アメリカ彦蔵）を読んでいたら、隣（窓側）に座っていた金髪美人から声を掛けられた。“中国では、右から左に向かって、文を縦に読んでいくのか” という質問であった。僕は日本人で、このような本は中国から伝わってきた Traditional なもので、最近では左から右に書かれている洋式のスタイルも多いと説明した。少し話すと、彼女はオランダからの移民の子であり、何と、この便のパイロットの奥さんであることがわかった。彼女から、ぜひコックピットに行ってみてください、と言われちょっと驚いたが、朝食後に彼女がスッチーに頼んでくれ、本当に行けるこ

とになってしまった。彼女は明らかに 180 cmを越す大柄であり、さすが南アフリカ！という感じであった。操縦士 2 名とその後ろにエンジニアが 1 名、意外に狭い室内で、忙しく働いていた。右側の操縦士がハズであった。挨拶程度の会話を少ししたが、あと 1 時間くらいで着陸のためか忙しそうであったので、長い話はできなかった。とにかくスイッチが多くて操縦は大変そうだと感じた。

南ア航空の朝食だが、マフィンとハムエッグのボリュームがあり、また、何と言っても果物（ぶどう、すいか、メロン、オレンジ）が美味くて、これからのアフリカでの食事に期待を持たせてくれる内容であった。

コックピットから戻ると、あとは着陸まで隣席のパイロット夫人と話していた。ジンバブエ（ビクトリア・フォールズ）からボツワナを巡ってケープタウンに向かうということ話を話すと、彼女から、またコックピットに入れてもらいなさいと言われた。特に、コックピットから見るケープタウンの眺めは素晴らしいとのことであった。

機内から見える、朝日に輝くヨハネスブルグの街は思いのほか小さく、高層ビルも少なかった。また、金を採掘した後の土砂を積み上げたボタ山“マインダンプ”も、たくさん目にすることができた。

香港を発って 12 時間少し、10700 呎を飛んでヨハネスブルグの空港に到着した。この空港はたいへん広く、免税店も充実しており、ビクトリア・フォールズ行きの SA40 を待っている間、それらを見て廻った。

9 時 10 分（現地時間で日本より 7 時間遅れ）発の便に乗るべくバスで飛行機に向かったが、機長がいないということで再び待機させられてしまった。この時間に、名古屋から来た 1 組の老夫婦の方と話したが、彼らのツアーは他の全員がキャンセルしてしまってメンバーはたったの 2 名であり、しかも添乗員付きとのことであった。マイ添乗員ということなのだろうが、近ツリも随分と大盤振る舞いをするんだな、と感心してしまった。

何時間待たされるか不安であったが、別の機長を連れてきて約 1 時間遅れで何とか離陸できた。機内食のクラブサンドは中々美味かった。11 時半頃から飛行機は少しずつ降下してきたが、緑の少ない茶色い大地がどこまでも続いていた。これは季節（冬）の所為なのか、雨が少なく不毛化しつつあるのか、などと考えた。

11 時 40 分、ビクトリア・フォールズ着。ヨハネスブルグの空港はひんやりしていたので、ここの日差しはとても暑く感じられた。しかし、カラットして日陰は涼しく、また、ターン・テーブルもない小さな飛行場はアフリカらしさを感じさせた。機内から運ばれるスーツケースは、無造作に置かれるだけであった。

待っていたマイクロバスの後ろには、スーツケースを収納するための貨車が

ついていた。ドライバーはビゼットそしてガイドはレミントンということで、一路レインボーホテルに向かった。小堀さんから、翌日の現地オプションについての話があり、バルーンに乗る (US\$25) か、ザンビア側に抜けるコース (US\$56) ということであった。バルーン (気球) に乗ってビクトリアの滝を眺めるのも素晴らしいだろうが、ここまで来たのだから、僕は是非ともザンビアに行こうと思った。道路の脇の砂は鉄分が多いのか赤く、ヨルダンのワディ・ラムを思い起こさせた。ビクトリア・フォールズの町の中心はとてもコンパクトで、あつという間にバスは通り過ぎてしまった。

荷物を部屋に運んですぐに昼食となった。メインディッシュはマス料理で、さすがに外で食べると美味しく、プールサイドからは青空が美しく、バルーンが楽しそうに浮かんでいるのが見えた。太ったネコがおもらいに来て、人気者になっていた。

しばらく休んだ後、ザンベジ川のサンセットクルーズに出発した。船着場に着くと、土人のスタイルをした現地人3名が、マラカスやタイコなどで迎えてくれた。“Queen of Deriba” という船に乗り込んだが、ピラナ船長の他、モーゼス、リチャード、エルビス、そして土人の格好をしたシルベスタがクルーであった。ゆったりとした流れのザンベジ川を、まずはビクトリアの滝の方向に進んでいくと、目と耳だけを川面から出したカバが視界に入ってきた。小堀さんから、カバは見かけと違って獰猛で人を襲うこともあり、通常は6～7分だが場合によっては10分以上潜ることもでき、お母さんカバになると2tもあり、寿命は40年という説明があった。岩にへばりついて動かないワニが見えたが、まるで置物のようであった。また、しばらくすると小さなワニが泳いでいたが、ワニは肺が大きいと4時間も潜っていられ、2.5mの大きさになると妊娠可能になって、一度に30～60個も産卵するという。寿命は100年にもなるそうだ。

しばらく進むと、今度は滝とは反対の方向に進んで、ザンベジ川の美しいサンセットを鑑賞した。時間がゆっくりと流れている感じがした。日が沈むと同時に鳥が鳴いたのが印象的だった。事前に小堀さんから、日が沈むとかなり冷え込んでくるので、着る物についての注意があったが、土人スタイルのシルベスタが寒さに震えていたのが面白かった。

その後、バスで一旦ホテルに戻ったが、夕闇の中にまだバルーンが浮かんでいるのが見えたが、とても幻想的であった。一度に25人乗れるバルーンは観光客がいれば日没まで何度も催行され、おそらくあれが本日の最終であるとレミントンが教えてくれた。ホテルには18時半に戻り、19時にはアフリカン・バーベキューの夕食へと向かった。その出発前にレミントンが南十字星を指し示してくれたが、僕も、コールサック (石炭袋) やケンタウルス座の α 、 β 、カノープスといった南天の星々についての知見を語り、星座の話で盛り上がった。

彼はりゅうこつ座とほ座が作るにせ十字やアンタレスとさそり座、南の冠座などについても教えてくれた。

ビュッフェスタイルのアフリカンバーベキューレストランは、『The Boma』という名前で、ちょっとポリネシアンぽい感じであった。最初に、かぼちやのスープが運ばれ、その後はバイキング形式で、好きなものをとってくるのだが、サーロイン、ワニ、バッファロー、ダチョウ、いも虫などを食べた。サーロインは期待した味であり、ダチョウは串焼きになっていて、それぞれとても美味しかった。いも虫は少し苦くて決して美味いとは言えなかったが、いも虫を食べた証明書をもらったきた。食事中に、現地の若者による民族音楽と踊りのショーが3回ほど行われ、何回か写真を撮りながら見てきた。よくある黒人の踊りといった感じで、特に目新しくもなく、どれも短い時間で終了した。まあ、雰囲気だけは味わえた感じであった。

食後も、レストランの外で夜空を眺めたが、天の川も美しく見えて、空気が澄んでいることを感じさせた。夕陽といい、星空といい、久しぶりに“地球に生かされている人間”という思いを実感できた。

8月13日（月） 晴れ

時差ボケのためか、2時半過ぎと4時近くに目覚めてしまったが、結局、さわやかな鳥の鳴き声で6時16分に起床した。ベランダ越しに見えるジンバブエの朝焼けは、とても美しかった。6時50分頃、前の建物越しに朝日が顔を出したが、暑そうな太陽であった。6時55分、そろそろ朝食に行こうかと思ったところに、ルームサービスで紅茶が運ばれてきた（これは頼んでいないのに持ってきてくれたので、サービスと思われる）。三ツ星ということだが、このホテルの部屋は、ツインのベッドの他に二段ベッドが備え付けられていて、部屋も広くて快適であった。

朝食は小堀さんと同じテーブルであったので、いろいろな旅行の話をつたが、彼女は、去年は6割を海外で過ごし、ほとんど（95%）がヨーロッパ、5%くらいがアフリカということであった。次回はドイツの予定が入っているそうだ。

滝のしぶきでグショグショになったとき用の予備の靴やタオルをホテルに預けて、8時に出発した。そのときレミントンに、おみやげとして日本から持参したハブラシをプレゼントした。彼は30歳で、1歳2ヶ月の男の子がいるということであった。ビクトリアの滝に向かう途中、焼け爛れたホテルらしき建物が見えたが、五つ星のエレファント・コンチネンタル・ホテルで、1ヶ月半くらい前に火事で焼失してしまったそうだ。今後1年くらいかけて再建されるとのことである。

バスを降りると同時に黄色いレインコートが手渡され、それを着込むと、国立公園の入り口をくぐって進んだ。中にある滝の全体図による小堀さんの簡単な説明に続いて、まずはリビングストンの像から観光がスタートした。イギリスの探検家デビッド・リビングストンによって1855年に発見され、当時のビクトリア女王に因んで名付けられたということであるが、現地語では“MOSI OA TUNYA”（雷鳴の轟く水煙）と表現されるそうだ。水しぶきが多いので濡れてしまう、という出発前の添乗員さんの連絡を受けて、アフリカらしいワイルドさを期待していた。

初めは第2渓谷（デビル滝）で、落差は70mとのこと。1億8千万年前には、ビクトリアの滝は200キロ以上も先にあり、岩が削られて移動しているとの説明があった。次に73段の階段を下って、メイン滝に進んだ。この滝は93mの落差があり、滝の中洲になっているキャタクト・アイランドは岩質が硬いので島状に残っているのだそうだ。この国立公園内には400種の植物と80種の野生動物がいて、実際この時、1頭のブッシュバックを目にしたが、猿やマングースなどもしばしば目にするとのことであった。ホース・シュー滝に向かう途中、イチジク的一种で野生動物も食べるという植物があり、レミントンはとても美味しいと話していた。続いてリビングストン島も見えてきて、95mの高さのホース・シュー滝、108mと落差が最大のレインボー滝と進んだ。これらは、どれも水量が豊富であり、壮大な美しさを呈していた。風向きの関係か、思ったほど水しぶきが飛んでこなかったが、将に、雷鳴の轟く水煙に相応しい滝であり、名前からの優美なイメージとは異なり、ずっとずっと雄々しかった。ナイアガラ、ビクトリア…残るはイグアスカ、一体いつになるのだろうか、などとも、ふと思った。

しばらく歩くとザンビアとの国境になっている鉄橋が見えてきた。これは1905年にセシル・ローズがアフリカ横断鉄道を作った際に設けられたもので、その中央ではバンジージャンプが行われていた。US\$90とのことだが、混んでいるときには1日100人くらいの挑戦者があるという。1万円も払って、よくあんな怖いことをするな、とビックリするとともに感心してしまった。でも、1日100万円にもなるのか……。レミントンも一度挑戦したそうだが“like dead”ということだった。また、ザンビア川の水嵩が1.5m上昇すると、この鉄橋の下水位は30mも上がるということであった。

バスに戻る途中には、ホロホロ鳥、マングース、blue wax bill、赤ちゃんの泣き声のような trumpet phone bill などを目にすることができた。レミントンによるとビクトリア・フォールズの住民は約4万で、そのほとんどは観光収入で食べていて、日本人はもちろんのこと、米、スペイン、独、伊、英などの観光客が多いそうだ。

バルーンでなくザンビアを選択したグループは、ザンベジ川に架かる鉄橋を越えてザンビアに入国し、リビングストンの町側からビクトリアの滝の観光を続けた。ガイドはグラハム・ヤングさんで、白い顎ヒゲが特徴的な 60 歳過ぎのおじいさんであった。

まず、足元に象の糞があり、木が倒されているのは象が歩いた後という説明に驚かされた。特に、ザンベジ川の水嵩が少ない 10～11 月は、象たちは川を渡り歩くそうだ。ザンビア側からの滝の眺望は少し距離を隔てているので、また、水しぶきを浴びない風向きであったので、冷静に眺めることができた。滝にかかる虹がとても美しく、“Victoria” というグレースフルなネーミングに相応しい表情を見せてくれた。太陽光線の加減で虹が形成され、通常は 14 時頃が見頃なのだそうだが、われわれはサークルになっている虹も見ることができた。また、遠くにバルーンが上がっているのがファンタスティックであった。ちょうどザンビアのこの辺りまでで、先ほどのリビングストン像から 1.7 km ということであった。



近岡さんの奥さんは帰国子女であり、流暢な英語を話され、グラハムさんからリビングストン（人口 15 万人、ザンビア全体では 100 万人）の町の 90% が無職であり、その理由が何もしたくないためであることや、35% がエイズに罹患していること、更にはかつてのローデシア問題などについても聞き出されていた。滝の出入り口近くには、大きいけれど粗末なおみやげ屋があり、木製品などを安く売っていた。やたらと話し掛けてきてフレンドリーにしてくれるので、僕も US\$ 2 で現地の太鼓を購入した。象やカバなどの木彫りも買っておけば良かったと、後で後悔することになった。

ホテルに戻り、昨日と同じプールサイドでチキンの昼食をとった。昨日とは異なるおしとやかな別のネコがいて、チキンのかけらをあげてもあまり手を出さなかったのだが、後から昨日のがやって来てガツガツ食べていた。ホテルのフロントには、現地ツアーのパンフレットが置かれていたが、“ELEPHANT BACK SAFARIS” というのがあった。象の背中に乗ってのサファリなんて、是非やってみたいと思った。

13時にバスは出発し、5分ほど走って **Big tree** と呼ばれる樹齢1500年、高さ43m、太さ23mもある世界一のバオバブの木を訪れた。一部、象が食べてしまったところがあったが、その為か周囲を防御フェンスで囲まれていた。バオバブの木は水分が多くて軟らかいので、象が好むそうだ。辺りには、象によって倒されたと思われる木々が結構あった。

不揃いな高さの木々が両サイドに広がり、すれ違う車もほとんどない道路を、バスは100キロを越えるスピードで、一路チョベ国立公園の町カサネを目指して進んだ。バスのクーラーが故障し、昨日が祝日で、今日は振り替え休日のために直せなかったのとコメントがあった。クーラーは壊れていたが、乾いた風は爽やかで心地よかった。進むにつれて木が少なくなっていくように感じたが、そんな時バスが急停車し、右手に象、左手にはクードゥーが見え、一気にサファリの雰囲気が出てきた。14時近くになって、再びザンベジ川が見えてきたが、14時15分にボツワナの入国手続きが行われ、たくさんの山羊が出迎えてくれた。入国に際して、各自の靴の底とバスのタイヤの消毒が行われた。靴の底で消毒液の浸された布を踏むのと、バスは消毒液の入ったと思われる水溜りの中をゆっくり進むだけである。こんなことでは十分な消毒は無理だろうから、一種の儀式と考えた方がいいのかもしれない。このアカシヤの木は、オミクジを結んだような感じになっていて面白かった。

バナナの畑を過ぎて、ゴルフ場が見えたと思ったら、そこがクレスト・モワナ・ロッジであった。5ツ星ということであるが、ポリネシアン風のリゾートホテルといった感じであった。ロビーを抜けた中庭には大きなバオバブの木があって、雰囲気を出していた。部屋に入ると、まず、天井からベッドの上に垂れ下がっている白いレースの蚊帳が目についた。虫が多いのだろうか、とちょっと心配になったが、エアコン付きでとても落ち着ける雰囲気であった。

15時15分にロビーに集合してチョベ川ボートサファリに出発した。ホテルはザンベジ川の支流であるチョベ川沿いにあり、船着場もすぐのところであった。2階建てのボートであったが、日差しが強いので1階席に陣取った。川面を渡る風は比較的涼しく、直射日光を避ければ快適であった。真っ先に姿を現したのは、スペアの羽根があるという黒い鳥 **spare wing goose** であった。しばらく進むと、右手にたくさんのカバが見えたが、目と耳くらいしか見えず、せめて昨日よりも姿をみせて欲しいと思った。しかし、昨日のはサンセットクルーズなので、動物が見れなくても仕方がないのかもしれない。左手のブッシュの中には、数頭のクードゥーとインパラも見えた。チョベ川をはさんで右手にはサバンナが広がっていたが、遠くに象の大群が見えてくると、途端にサファリ・ムードが高まってきた。チョベ国立公園には約7万頭もの象がいるということで、会えることを楽しみにしていたのだが、たくさんの象を目の当たりに

すると、アフリカの大自然の中にいることを実感できるようになってきた。象たちは、草を食べたり、水を飲んだりしていたが、いくつかの群れに分かれているようで、派閥とかがあるのかなと考えてしまった。また、バッファローやサル（チャップマン・バブーン）、ホロホロ鳥なども視界に入ってきた。左手の木の梢にはアフリカン・フィッシュ・イーグルが羽根を休めていたが、獲物を狙っていたのであろうか。この鳥は、われわれの宿泊したロッジのキーにも描かれていたが、頭部と尾の白と茶色の羽根が美しかった。その他、ウォーター・バックやプクなども見ることができた。

夕暮れが迫ってくると、森のねぐらに帰るために、象たちが中州からチョベ川を横切って渡る風景を眼前にとらえることができた。特に、仔象の周りを大人の象たちが取り囲んで守るように川を渡っていく様子は、微笑ましいというか感動的な光景であり、さらに、ボートのすぐ真ん前を彼らが渡っていく様子は圧巻であった。



(目の前を像が横切るのは迫力満点！)

18時09分が日没であった。昨日同様、夕陽が沈んでいくのをしっかりと見届けたが、日没時には鳥の鳴き声が聞こえた。雄大な Sun set であった。このような自然を破壊し続けていく人間は、地球にとって大変有害な存在であるというような思いに駆られた。日没とともに、ボートはホテルに向かった。ねぐらに帰るのか、鳥たちが翼をはためかせて飛んでいる姿が、夕焼けに映えてとても美しく、旅情を感じさせた。

ホテルでの夕食は19時から22時まで、好きな時に行くように言われていたので7時半頃となった。バイキング形式であったが、期待した果物はまあまあであったが、サラダとアイスクリーム、そして南国で飲むパッション・ジュースは美味かった。ここで“ステーキ事件”を記さなければならない。バイキングのコーナーとは別の所でハンバーグステーキを焼いていて、注文すれば食べられるということで、田澤さんと相澤さん、佐藤さんが注文して食べることになった。(僕はもう満腹であったので、ノーサンキューということにした。)焼いているときに、その煙で火災報知機が何度も作動してしまい、その都度、彼

らから『ナイス・パフォーマンス!』という歓声が上がっていた。僕は別のテーブルについていたので、彼らの楽しそうな笑顔を見ながら、お先に自分の部屋に戻った。戻ってみると、『地球の歩き方』などを入れた手提げ袋を、椅子のところに忘れてしまったことに気付き、慌ててレストランに戻った。すると、田澤さんがチェックにサインしないで帰室してしまい、相澤さんと佐藤さんがウェイター達ともめているところであった。ハンバーグと思っていたのは、ヒレステーキであり、それは別料金で **55BWP** ということであったが、**US\$55** と思って、法外な料金を要求されたと勘違いした相澤さん達もめていたところであった。早速、僕は米ドルではない旨を確認し、レストランから小堀さんに電話して、田澤さんに戻って来てもらうよう連絡をとった。彼らは、別料金だったら注文しなかった。あのステーキは詐欺だ!と怒っていた。僕も部屋に戻る際に、田澤さんからステーキを一切れ戴いたが、ファミレスのステーキといった感じで、決して美味しくなかった。

チョベの星空も、たいへん美しかった。きれいな星々を眺めていると、宇宙の歴史がわれわれの生命にも受け継がれていることを実感できる気持ちになった。少し迷ったが、結局、蚊帳は張らないで眠った。

8月14日(火) 晴れ

少し早めに、5時40分ころに外に出て夜空を仰ぐと、大星雲(M42)を含むオリオンの剣にあたる部分が三ツ星より上にある、北半球とは反対のオリオン座が見え、シリウス、プロキオンといった冬の大きな三角形が美しかった。

早朝のサファリは風を切るのでもとても寒いので、服装には注意するようにとの小堀さんのアドバイスに従い、ポロシャツの上にセーター、そしてブルゾンを着込み、ゴルフ用の雨よけを羽織って、さらに首にバンダナを巻いて参加した。6時10分に集合すると、すぐにサファリカーに乗り込んだが、われわれの車には毛布が積み込まれていなかったの、わざわざ毛布を積み込んでもらってから出発した。小池さんご夫妻と青山さんが2列目、田澤さん親子3名が3列目、相澤さんと佐藤さんと僕が最後列に陣取った。夜明け前の出発になった訳だが、物凄く寒くて、用意していった使い捨てカイロを使用する破目となった。冷たい風を避けるために、リュックに入れていたマスクも着用した。

われわれのドライバー兼ガイドはビクター(Victor)であった。公園内に入ると、まずはインパラの群れが見え、しばらくドライブすると5~6頭のライオンを見ることができた。オスのライオンのタテガミが見たかったのだが、今回は、メスと仔ライオンの群れであった。ライオンにしる、種々の動物は、木々の色と重なって中々分かりにくく、居住する環境に適応しているように思えた。陽が昇ってくると少しは寒さが薄らいできたが、それでも毛布を離せなかった。

チョベ川のほとりで休憩し、コーヒーで身体を温めると、僕は他のサファリカーの、イタリアのトリノからやって来たという若い夫婦と話をした。最近はどこへ行ってもイタリア人観光客が多いと話したところ、ユーロへの変換のために裏金が使えなくなるので、一時的なバブル状態であるからと説明してくれた。

休憩後は助手席に座って、ビクターから説明を聞き、皆さんにガイドしながらのサファリとなった。まずは、**Wild dog** が2匹出てきた。彼らは何を食べるのだろうかと思っていると、車はブッシュの中を進んで行き、両手にたくさんの象が出現した。近くで見る象はとても迫力があり、特に、サファリカーの前の道を象の群れが横切る光景は圧巻であった。象は夜になると、この辺りで横になって眠り、昼間は **too dry** の草ではなく、水分を多く含んだ川辺の草と水を求めて移動するそうだ。

ビクターは40歳とのことだが、彼が子供の頃、この辺りは国立公園になっておらず、ほとんど手つかずの状態、ヒョウなども度々目にしたそうだ。最近、ヒョウはめっきり目にしなくなったと話していた。ロッジのあるカサネの町の人口は8000人くらいだと思うが、今年になって人口調査が行われたばかりなので、よく分からないとのことであった。

ちょうど9時前ころ、遙か先の道路をキリンが横切るのを見かけ、**hurry up** させて向かったが、ブッシュに隠れてしまい後ろ姿だけしか見れなかった。動物も度々道路を横切るということだが、中でも、クードゥーはジャンプするので、夜間たいへん危険であり、時々事故も起こるということであった。カサネの町中では建設中のポリス・センターが大層立派であり、何か場違いのような印象を受けた。ダイヤモンドの産出国として、南部アフリカで最も豊かといわれるこの国でも、公共事業にはたくさんのお金をつぎ込むのかなと思った。

ホテルに戻ると遅い朝食をとった。その際、9名の希望者がいるが、7名しか参加できないというナミビア・ツアーの抽選があった。僕は残された最後のクジを引き、外れてしまったが、夫婦で1枚しか当たらなかった小池さんが譲ってくれて何とか参加することができた。

結局、ナミビア・ツアーには相澤さん、佐藤さん、安藤さんご家族の計7名が参加することになった。小堀さんから、ダルマインという現地ガイドを紹介され、10時半過ぎにホテルを出発して、出国手続きのために町中にある事務所に向かった。この途中、トラックの荷台に乗せられたが、途中、風で帽子が飛ばされてしまった。“**No problem**”と言って、ダルマインが走って拾ってきてくれた。その間、車はちょうど小さな市場の前に止まったので覗いてみると、魚の干物が売られていて、たくさんのお客がたかっていた。こんなところでも干物を食べるのか、と不思議に思った。手続き後は、再びホテルに戻り、例の船

着場から3台のカヌーに分乗してナミビアへ向かった。ダルメインともここでお別れ。彼が付き添ってくれるのかと思っていたので、少し不安になってしまった。ここでも僕が通訳兼ガイドを務めることになった。

10時45分に、相澤さん、佐藤さんと共にカヌーに乗船した。日差しが強くて少し暑かったが、カヌーで国境越えというのは、とても粋であった。

ナミビアに到着すると、すぐに入国手続きが行われ、カヌーの漕ぎ手の一人がガイドとなって、40~50分の散策というツアーになった。先ほど、サファリの休憩時間に話をしたイタリア人夫婦が前を歩いていたので、挨拶をした。彼らの英語はよく理解できたので、一緒に廻りたかったが、われわれよりもどんどん先に進んでいってしまった。

ここはチョベ川とザンベジ川にはさまれた **Impalila** 島といって、インパラス？という動物に因んで命名されたという。ジンバブエとボツワナとザンビアといった3つの国との境を持つ20 km×8 kmの広さで、人口2000人、現在も電気がなくて、ローソクなどを使用しているとのことであった。90の部落に分かれていて、一番大きいのが **Kafuvu** 村で、人口は100名で、これからその村に向かうという。

川べりの道を進んでいくと、蚊なども多かったが、20分くらいで部落に到着した。たくさんの子供が遊んでいたが、今日は祝日のため休校であるとのことであった。この島にはジュニアとシニアの2つの学校があり、現地語のゾビア語の他に英語も教わっていると話していた。この島に着いたら子供達に渡してくれと、ダルメインから預かったお菓子を彼らに手渡すと、喜んで集まってきて写真に収まってくれた。きっと虫歯が多いのでは、と彼らの口の中を見せてもらったが、乳歯には多くの虫歯が見られ、少し複雑な思いを抱いた。

ここでは、竹製のスリーピングマットや魚網などが作られているようで、実際、老女がスリーピングマットを作っている光景が見られた。権利を譲ってくださった小池さんに何かおみやげをと考えたが、とても持ち運べるような大きさではなかった。大人はほとんど見かけなかったが、この島に2つあるロッジで働いているか、フィッシングをしているということであった。

土と木で造られた粗末な家屋は、主が亡くなると壊されてしまい、子供はまた別のところに家を造るということであり、壊された家の後もいくつか見られた。既婚者の家の周りは、一部竹製の柵で囲まれるとのことであった。また、チキンケージという、チキンを焼く釜戸はヘビなどに食べられないようガードする、といった説明があった。

部落を抜けて、1968年にドイツによって造られたというチョベ川とザンベジ川の間を流れる小川に架かる橋のところで小休止してから、帰路についた。ガイドの英語は訛っていて聞き取りにくく、おまけに日本の大統領は誰だとか、

日本では **manufacturing** をどのようにハイテク産業に結び付けたのか？ などといったことを質問され、返答に四苦八苦しってしまった。

再びカヌーに揺られ、岩の上に佇んでいる鵜などを見ながら、ゆったりとした雰囲気を楽しんだ。船着場に到着すると、パスポートをいつもとは違うポケットに入れてしまったため、一瞬、紛失してしまったか！とあせった。ナミビアで落としてしまったのか？（またナンビアに戻るのは面倒でいやだった）、まさか川の中に落としたんじゃないか、とか血の気が引いてしまった。トルコ旅行のときパスポートを紛失した野津さんの気持ちを、ほんの少し追体験した感じであった。ダルマインがホテルに来る間、ロビーで待っていると、他のツアー（近ツリ）の人達がサファリから戻ってきたが、彼らは今朝ビクトリア・フォールズからやって来て、この後空港から南アに向かうという。随分と忙しい行程である。

再びダルマインのトラックの荷台に乗ってボツワナへの入国手続きを済ませた後、テラスで昼食をとった。ナミビアに行かなかった人達は、ホテルのプールで泳いだりして過ごしたそうだ。他のツアーでは、ゴルフをした方もいたようであった（クソ暑いのに！）。

少し休憩し、15時25分にロビーに集合してイブニング・サファリに出発した。ドライバーは再びビクターであり、早朝サファリのように寒くはないので快適であった。象、クードゥー、インパラ、ホロホロ鳥、バブーン（サバンナヒヒ）、**Egrete**（シラサギ）、カバなどを見ることができた。朝よく見れなかったキリンもしっかり見れて嬉しかった。また、走っているキリンも見ることができたが、クビが大きく揺れ、その長さや重さが伝わってくる感じであった。

見飽きるくらいいたホロホロ鳥たちはチョロチョロ歩いており、車に轢かれそうになるとヒラリと身をかわして逃げる様子は、漫画チックで面白かった。

遠くの川べりに4匹のワニが横たわっていたが、やはり置物のようで、もっと近くまで行って見てみたかった。近づくと言えば、われわれの車は、幸運にも水辺にいた8頭のキリンに接近することができた。キリンは臆病ですぐに逃げってしまうということだが、間近に車が来たのに慌てて、8頭ものキリンが一斉に逃げ出す緊迫感のあるシーンを見ることができた。逃げ足はとっても速くて迫力があつた。ビクターから、ライオンがキリンや仔象を襲うときは、後ろから乗り上げて倒してしまうという話を聞いた。ちょっと残酷だが、そのようなシーンも見てみたい気がした。彼は実際に何度か見たことがあるそうだ。

無線で連絡をとりながらのサファリなので、助手席に座るとちょっと **noisy** だが、おかげで効率よく動物達を見ることができた。サファリのビッグ5のうち、象、ライオン、バッフォローの3つまでを見ることができて満足であった。（ヒョウやサイは難しそうで、初めから半ば諦めていた。）ビクターは、クード

ウーが好物で、とてもデリシヤスと話していたが、それを聞いて田澤さんは、ぜひ食べてみるということで、さっそく夕食時に試した。しかも、ミディアムレアで。僕も一口ごちそうになったが、軟らかいクジラの肉のような味であった。田澤さんによると、熱いときの方がもっと美味かったとのことであった。

ホテルに帰る途中、ビクターにも歯ブラシを謹呈すると、カサネの町にも1軒歯科医院があるが、混んでいるので、ぜひこちらで歯科医院を開業してくれと言われた。また、公立の病院は安い、ベテランの Dr が経営する個人のクリニックは高いことなどを教えてくれた。

8月15日（水） 晴れ

7時にモーニングコール。朝食後、8時半の出発となったが、レミントンがビクトリア・フォールズからバスで迎えに来た。開口一番、あの歯ブラシでしっかり磨いているということであった。再び、小規模なバナナ畑などを見ながら、バスはビクトリア・フォールズの空港に向かった。クーラーはまだ直っていないとのことであったが、窓を少し開けただけで爽やかな風が入ってきた。

少し進むと、道の脇で数頭の象が葉を食べている姿が見れた。レミントンは、今朝チョベに来る途中、道端でチータを見たと話していた。ロッジのパネルに **Lion kill** というのがあり、昨日小堀さんにも聞いてみたのだが、誰もわからず、レミントンもビゼットも知らないということであった、おそらく、ライオンが捕らえた獲物の後（食べ残し）ということかもしれない。また、ナミビアのインパリラ島の由来となったインパラスについて、インパラとは違うのか尋ねたが、よく分からないとのことであった。

空港での別れの際、ビゼットから、数年後、今度は家族で来るよう、その頃にはヒゲを蓄えて貫禄をつけておくから、と言われたので、是非ともこの国のプレジデントになってくれと答えた。すると彼はレミントンをバイスプレジデントにして待ってるよということで、笑ってサヨナラした。

空港の待合室では、近ツリの人達がサンドイッチとフライドチキンの弁当を食べていたのが印象的だった。

SA41 にてヨハネスブルグへ、そして SA347 にてケープタウンに飛んだが、機内食は2回とも同じチキンサンドで閉口した。SA41 で隣に座ったプレイガイドツアーの人といろいろ話したが、われわれの内容の方が明らかに充実していて、ちょっと誇らしく思った。

16時52分、茶色が続いていた大地に緑が多くなってくると、ケープタウンは間もなくであった。しかし、雲が多くてコックピットからの眺めも悪そうであり、パイロットの奥さんもないことだし、コックピット作戦は中止にした。飛行機は一度ケープ半島の方に抜けて、フォールズ湾側から空港に着陸した。

17時10分であった。天候は曇りで、14℃ということであったが、空港を出ると小雨が降っており、虹が見えていた。

ドライバーはクリスタルさん、ガイドはトニーさん（45歳）であった。大型バスの後方に乗り込んで市内を見ていくと、スラム街が広がっていたり、原発があつたりして、ビックリさせられた。近岡さんが、飛行機から見て、整然とした街並みの中に、所々スラム街が見渡せたと話していたが、実際に、このようなスラム街を見て複雑な思いであった。

左手にライオン・ヘッド、右手にはテーブル湾と、その沖合にマンデラ氏も収容されていたロビン島があるという説明を聞きながらしばらく進むと、資金不足に陥り、1973年で建設を中断したままになっている高速道路があつた。これは来年か再来年に工事が再開されて、2年後くらいには完成するということがあつた。信号待ちの交差点では、子供が新聞売りをしていて、治安が悪そうな印象を受けた。小堀さんから、子供の物もらいには十分注意するよう、また、乗合タクシーは危険なので、普通のタクシーに乗るよう注意があつた。南アフリカは失業率が23%にも上昇して不景気で、アル中と麻薬が社会問題になっているという。テーブル・マウンテンは厚い雲に覆われていて、頂上を望むことはできなかった。

程なくしてビクトリア・ジャンクション・ホテルに到着した。このホテルでは、ちょうど『Dental Radiology Update』というワーク・ショップをやっていたが、覗いてみると、デジタル・パントモ X 線撮影装置の説明発表会のようなものであつた。

7時にホテルを出発して、ウォーター・フロントの両替所に寄ってから日本食のレストランに向かった。途中、この辺りのコンドミニアムは150~200㎡でUS\$20万くらいであり、最高級車はBMWという説明があつた。この街はヨーロッパ人がリタイアした後に住むことが多いそうだ。

『富士山（ふじやま）』に入ると、BGMは「みちのく一人旅」であつた。天井が高く、和食の店にしてはちょっと落ち着かない感じであつたが、久々にお刺身と天ぷら、寿司を食べ、田澤さんと、佐藤さんの3人で、赤・白のワイン各1本と、日本酒を2本空けて、すっかり酔っ払ってしまった。田澤さんはチューブ入りの生わさびを持ってきており、このときだけでなく、ダチョウのステーキなどの際にも利用させていただき、ワインなども度々ごちそうになり、たいへんお世話になった。都内の耳鼻科開業医で中学生と小学生の2人の男の子を連れての傘下であつた。僕の同級生（岡田恵）のお父さんと同じ医師会ということであり、歯医者さんは経費がかかって大変ですね、と同情されてしまった。

夕食後にケープタウンの夜景を見に行ったシグナルヒルでは、大した雨では

なかったが、酔いと強風によって、傘をどこかに飛ばされてしまった。

ホテルに戻るとボタンキューであったが、階下ではディスコか何かで騒いでいて、2時半頃に目覚めてしまった。この騒ぎは5時近くまで続き、気になってなかなか寝付けなかった。

8月16日（木） 曇りときどき晴れ、一時雨

朝、田澤さんから、昨夜はホテルの1Fのバーで待っていたのに、佐藤さんも僕も来なかったと、残念がられた。そう言われても、全く記憶がないので、かなり酔ってしまったものと思われる。申し訳なかったですね…

テーブル・マウンテンは厚い雲に覆われており、8時14分現在、強風のためにテーブルカーが動いておらず、予定を変更して、まずは簡単な市内観光が行われた。まずは、1488年、喜望峰を発見したポルトガルの航海者バーソロミュー・ディアスの像が目に入った。少し進んでWOOLWORTH（イギリス系のイトー・ヨーカ堂をちょっと高級にした店）を左折すると、ケープタウンの駅が見えてきた。地元の人がバスに向かって手を振ってくれたので、それに応えてしまった。

駅を越えると、キャッスル・オブ・グッド・ホープ（喜望城）はすぐであった。1666年から30年かかって1697年に完成したこの建物は、オランダの東インド会社総督の居城として（海からの敵を防ぐために）造られ、一辺が175m、高さが10mの五稜郭のような感じであるという。現存する南アフリカで最古の建造物であり、その前でバスを降りて写真を撮った。そのすぐ右手にはBig Benを真似て造られた、築100年の旧市庁舎があった。

再びバスで少し行き、今度は国会議事堂から迎賓館、17世紀にオランダ人が造った植物園（カンパニー・ガーデン）と、両側に緑の葉をつけた紫陽花の続く道を散策した。この国の歴史の重みが伝わってくるような雰囲気であった。南アフリカ博物館&プラネタリウムのところまで歩いたが、雲が厚くて、テーブル・マウンテンのことが気になった。

バスに戻って、10時からのデイカー島（アザラシ島）ミニクルーズに向かうため、ハウト湾の乗船場を目指した。ハウトはオランダ語で“木”を、デイカーは“潜水”を意味するそうだ。トニーさんが結婚10周年だが、日本では、デビアス社のCMで“10年たったらsweet 10 ring”というのがあるとか、金のアクセサリはデザインからしてイタリア製が最高などといった話があった。また、テーブル・マウンテンの西側の大西洋に面した所では、いい家はUS\$60万ということであった。また、この辺りの松とユーカリは他から持ってきて植えられたそうだ。

乗船までの30分あまり、おみやげを買ったりして過ごしたが、店を出ると物

凄いスコールであった。時間に遅れぬ様、その中をずぶ濡れになりながら乗船場まで走った。待っている間も、ひどい雨漏りのため、びしょ濡れになってしまった。傘は、昨夜シグナルヒルで飛んでいってしまったのだ！

風が強く、船は木の葉の様に激しく揺れ、インド系の人酔って吐いていたが、僕は遠くの景色を見ながら何とかしのいだ。二日酔いの上に船酔いではたまらないので、乗船前にプラミールを服用したのが良かったのであろう。ダイカー島にはたくさんのケープ・ファー・アザラシがいたが、どれも成獣前ということで小さかった。島を周回して、30分ほどでクルーズは終了し、無事に戻れてとにかくホッとした。乗船・下船時には地元のチンドン屋みたいな派手な衣装の3人組が、1本弦の足りないパンジョーとバケツの底を叩いて、歓迎をしてくれたのがおかしかった。

クルージングの後、佐藤さんから、ナスカの地上絵のセスナはあんなもんじやないという話を聞き、ペルーへの足が遠のいた気がした。彼はインドを初め各地へ行かれているようで、旅慣れた感じであった。一人で参加されているので、いろいろお話を伺うことができたが、仙台在住なので、成田へのアクセスに苦労するというのであった。

続いてバスはケープ半島を横切り、東側へと向かった。この間、小堀さんからいろいろな説明があった。南アのワインは世界で8番目の生産量(900億^{リットル})で、15%が輸出で、日本へは赤が、ヨーロッパへは白が多い。この辺りは高級なお屋敷が多く、サッチャー元英首相の家もある。おみやげにはノンカフェインのロイボスティがいい。ケープタウン周辺には25のゴルフコースがある。東海岸は西海岸に比べて、インド洋の影響で水温が5℃ほど高く、サメはいるが、アザラシやペンギンを食べるので、人間を襲うことは滅多にない…。Etc

11時50分を過ぎると日差しが出てきて、暖かな感じになった。フォールス湾(東海岸)の暖かさが伝わってくるようであった。そんな中、サイモンズ・タウンを通過した。ここは元々イギリス海軍の基地であったのだが、撤退後の現在では、南アの海軍基地になっている。ケープタウンからの電車もここまで通っていて、1時間くらいなので、通勤している人もいるとのこと。

12時15分、ボルダーズ・ビーチに到着した。最初に6匹のペンギンが下見に来た後、わずか数年のうちにたくさんのペンギンが住み着いたという。ペンギンを“誘拐”したり、卵を持ち去ってしまうような悪い人がいるので、現在では柵が設けられているが、間近にアフリカン・ペンギン(ジャッカス・ペンギン)を見ることができた。カメラを向けても怖がらず、人なつこいペンギンたちであり、特に、一斉に海に入っていく様子がかわいかった。40分にバスに戻って、オーストリッチ(ダチョウ)牧場へ向かった。

牧場のレストランに入るや否や、またスコールがあった。ぎりぎりセーフで

あった。ダチョウのステーキは屋外の屋根付きのバーベキューコーナーで焼いていたが、20枚も焼くので少々時間がかかり、待ち遠しかった。思ったよりも硬くて、ビクトリア・フォールズのアフリカン・バーベキューで食べた串焼きの方が軟らかくてずっと美味かった。ここでも田澤さん持参の生ワサビは結構いけた！食後にダチョウ牧場の案内があり、タマゴを孵化させる話や生後15ヶ月で食用になるという説明を聞いた。6500年前の化石が陳列されていたが、ダチョウはその間あまり進化していないようだった。茎状突起がとても長いのが印象的であった。

外に出るとスコールは上がっており、大型のエーランドが牧場間近にやって来ていた。この鹿は寿命15年くらいということだが、こんなに大きいのも4歳半くらいとのことであった。中に入って来られないよう、電流線が張られていた。ダチョウのえさを狙ってやって来た野サル達を見ながら、15時20分に牧場を後にした。

喜望峰自然保護区を進んでいくと、美しい花が少し見えたが、あと6週間もするとたくさんの花々が咲き誇るという。その頃に来れたらいいのだけれど…。ポルトガルから贈られたという、バスコ・ガ・ガマ、バーソロミュー・ディアスの白い記念碑が左右に見えると、喜望峰はすぐであった。野生のダチョウもいて、雰囲気をかもし出してくれた。天気も回復して、青空と青い海に映える喜望峰を訪れることができたが、風が強く、ディアスによって“嵐の岬”と名付けられたことを納得してしまうバック・グラウンドだった。



(とうとう来てしまいました！！)

喜望峰では、岩場を登ってその風景をしっかりと目に焼き付け、美しさを堪能した。船が1艘も見えなかったが、この辺りは海流がきびしいので、意識的に避けて通るのかもしれない。“CAPE OF GOOD HOPE”のサインボードと共に写真に収まり、海辺では、インド洋と大西洋の境となる海に向かって3つの石を投げた。ここでの観光は25分くらいで切り上げ、16時過ぎにはバスに戻り、今度はケーブルカーで灯台が立つ展望台に向かった。展望台からは、荒々しく砕ける波、バスコ・ダ・ガマがクリスマスに上陸したというクリスマ

ス海岸、そして、少し前に登ってきた最南端のケープ・ポイントが見渡せた。雄大な風景と眺望に感激すると共に、よくぞここまでやって来た！ことに感動し、少し感傷的な気分になってしまった。

1時間半くらいかけてケープタウン市内に戻り、直接ウォーター・フロントのショッピング街に向かった。ここは地元の人々で混んでいたが、自由行動となったので、おみやげを求めているいろいろな店をみて廻った。1時間半くらいして再び集合して、歩いてすぐのシーフードレストランで夕食となった。エビ、ムール貝など、結構美味しかった。田澤さんは生牡蠣を注文したが、誤って違うテーブルに運ばれてしまい、再び注文したが、あまりにも小さく、数も5つしか残っていないということで、キャンセルされた。

ホテルに戻ると、明日の帰国に向け荷造りをした。

8月17日(金) ケープタウンは曇り、雨 ヨハネスブルグは晴れ

テーブル・マウンテンは相変わらず、厚く重たそうな雲に覆われていた。ケーブルカーは動いておらず、観光は中止となり、ウォーター・フロントでのショッピングで時間を費やすことになった。結局、テーブル・マウンテンは3日間とも雲に覆われ、頂上を見ることができなかった。非常に残念である。

9時半過ぎにホテルを出発して、11時までショッピングとなった。昨日も来ているので、比較的余裕を持てたが、もうそんなに買うものもなく、結局暇を持て余してしまった。

空港に向かう途中、小堀さんからアパートヘイトの名残りのバラック小屋についての話があったが、ケープタウンは320万の人口のうち、7万人もがこのようなところで生活しているとのこと。ヨハネスブルグでは、650万のうち50万人もがこのような粗末なところに住んでいるとのことであった。

VATの払い戻しの手続きを空港で行った後、13時発のSA336に搭乗して2時間、ヨハネスブルグに到着すると、暖かくて晴れていた。ケープタウンは雨だったのに！！東京・札幌くらいの距離があるのだから仕方がないな、と思ったが、登れなくても、せめてテーブル・マウンテンの外観だけでも見たかった。この空港の銀行で、VATを米ドルで払い戻してもらい、ワインなどの買い物をし、ビジネスラウンジでビールを飲んで、慌しくSA286香港行きに搭乗した。

16時50分ころには搭乗したが、いつまでたっても出発しそうにない。忘れ物をした黒人が戻って来ないのを待っているという説明だったが、僕の座席のリクライニングが壊れていて、一旦リクライニングさせるとボタンが入り込んでしまい元に戻らなくなってしまうので、スッチーに文句を言うと、大分たってからエンジニアという太ったおじさんが直しにきた。しかし、叩いたりする位で、キチンと修理をしてくれなかった。一応直ったようなので帰ってしまっ

たが、すぐに壊れてしまった。今度は小堀さんがボタンの隙間に紙をはさんで応急的に直してくれた。添乗員さんというのはとっても大変。特に彼女はベテランらしく、全てにおいて、とてもテキパキと仕事をこなしてくれたが、旅の終わり頃は大分お疲れのようだった。結局、1時間20分遅れの離陸となった。

19時過ぎからディナーとなった。アフリカの思い出を反芻しつつ、赤ワインと共にスターターを口に運んだ。トマトとキュウリとサーモンが実に美味かった。水割りを飲み、メインにチキンを食べた（ビジネスに乾杯！）。

20時を廻って、飛行機はマダガスカル上空に入ったようで、所々にわずかなオレンジの灯を見ることができた。ナビによると、マダガスカル島の南部を航行しているようであった。

朝食時に、リクライニングがまた壊れてしまい **uncomfortable** であったと文句を言うと、お詫びのしるしとして、シャンパン（750ml）をおみやげにくれた。すでにワインを3本買っているのに、免税幅をオーバーしてしまうな、と思ったが、素直にいただいた。

香港時間の12時55分、高層ビルが海沿いの狭い平地に林立している香港上空を飛び、13時ジャストに着陸した。45分遅れであった。乗り継ぎを待つ間は免税店をみたりビジネスラウンジで寛いだ。

JL732 では、同じく南部アフリカを周遊したドクターツアーに1人で参加された50代?の女性（千葉の内科医）の隣になり、いろいろな旅行の話を伺うことができた。話が弾み、4時間ほとんど話していたので、あっという間に成田に到着してしまった（19時55分）。

壮大な滝を見て、たくさんの野生動物に会い、地の果てと思っていた喜望峰にまで足を延ばし、しかもビジネスで行けて、たいへん贅沢な旅行をさせてもらったと思っている。疲れたけれども充実したアフリカ旅行であった。

あとがき

昭和 48 年の夏休みに、当時の担任の関先生がアフリカに旅行し、翌年の春休みに、先生のお宅でその 8 ミリを見せていただいた。いつかは自分もアフリカに行って、野生動物を目の当たりにしたいと思っていたが、27 年の時間を超えて、やっと実現させることができた。

偉大な自然の中にさりげなくたたく動物たちを見ていると、人間の存在について、文明のあり方について、深く、強く考えさせられた---もっと謙虚でなければならない、今を生きることに奢ってはならないと思った。今回は、ジンバブエ、ザンビア、ボツワナ、ナミビアそして南アフリカと、5カ国も足を踏み入れることになった。喜望峰まで行けた到達感に加えて、優大なサンセットや美しい星空を仰ぎ見ることができ、人生観にも影響を及ぼすような“旅の重さ”を実感するものであった。

平成 13 年 8 月 25 日 (土)

鹿島 健司